
17 イギリスはやさしい？

ロンドンに住む日本人女性が、友だちたちと話をしている、「イギリス人は、やっぱり、やさしい」という結論に落ちついたと語っていた。私も、たしかに、イギリスには、やさしい人が多いと思う。1歳にならない娘をつれて外出したときなど、ほんとうに、人々のやさしさが身にしみた。子どもを抱いてバスや電車に乗って、席を替わってもらわなかったことが、ほとんどないといってもいいほどだ。子どもといっしょにいてだけで、人々のやさしさが倍増する。日本に帰ってから、子どもを抱いても、ほとんど誰も席を替わってくれない事実を思い知らされ、複雑な気持ちになってしまった。イギリスには、日本のような点字ブロックは、ほとんどないが、白い杖をつけて歩いていけば、交差点で必ず誰かが声をかけてくれるから、あまり必要ないのだ、というような話も聞いたことがある。

やさしさの対象は、人間だけにとどまらない。動物に対しても、限らない愛情が注がれる。私は、犬との相性が、いまひとつなので、日本だと、時々吠えられる。だが、イギリスの犬は、特別なことがない限り、あまり吠えない。とくに、ストレスのたまったような吠え方をする犬がほとんどいないのだ。まだあまりイギリスに慣れていないころ、大きな犬が多いので少しこわがっていたら、どこでも、この犬はジェントルだから大丈夫といわれた。犬にもジェントルというのかと感心しながら、ほんとうにおとなしい犬ばかりだと、少しびっくりしたものだ。吠えるときにも、飼い主に何かを話しかけるように吠える。

BBCの人気テレビ番組に、アニマル・ホスピタルというのがある。ケガや病気の動物の治療のようすを毎週紹介してくれるのだが、そこに登場する獣医さんや飼い主や、キャスターの白いヒゲの男性が、これまたすこぶるやさしい。診察台の上でいろいろな格好をさせられて、動物たちがよく荒れ狂わないものだと感じるが、みんなからなでられて、驚くほどおとなしくしている。まるで、日本のムツゴロウ先生がたくさんいるみたいだ。世の中、こんな人たちばかりだったら、どんなに暮らしやすいことだろうか。

だが、わたしには、どうしてもひっかかることが、ひとつだけある。かなり意地が悪く聞こえるかもしれないが、これが、ほんの数十年前まで、そして、

ある意味ではそれ以降も、植民地の人々を、ムシケラのように扱ってきた人たちと、同じイギリス人なのだろうかということだ。これまた、たいへん失礼な言い方だが、イギリス人は、世界の歴史のなかで、他民族をもっとも虐待した、5本の指にはいる民族だと思う。イギリスの人たちは、過去をすべて清算して、限りなくやさしい平和の使徒として、現在を生きているのだろうか。現代の世界の貧困や紛争は、イギリスの人たちにはまったく責任のないところから発生しているのだろうか。

イギリスは、レディーとジェントルマンの国だ。ひょっとすると、植民地支配が全盛の時代も、イギリスの人たちは、かなりやさしかったのではないかと思う。もちろん、牛肉を今よりも多く食べ、キツネ狩りをしていただろうから、今日とは少し違うだろうが、現地人の遅れた習慣を改め、洗練されたマナーを、ある意味では、ほんとうにやさしく指導していたのではないかと思う。

これは、決して皮肉ではなく、ましてやイギリス人の優しさが偽善であるなどといっているのでもない。そんな単純なことではないのだ。ただ、やさしい人たちの総和が、必ずしもやさしさになるとは限らないといたいのだ。その点では、私たち日本人も、まったく同じ立場におかれているということを、忘れてはならないと思う。

1996 新納泉 著作権フリー

【付記】イギリスにはほとんど見られなかった点字ブロックが、ロンドンオリンピックに際して整備され、地方のムラにまで完備されているのに驚かされた。やるとなったら、万全の態勢で整えるという、イギリスらしい気風を感じたものである。



新しく設置された点字ブロックや車止め
(2012年9月12日ロンドン近郊で撮影、著作権フリー)